

勇者が魔王に敗北したという噂は、すぐに国中を駆け巡った。絶望に打ちひしがれる者、信じられずに半狂乱になる者、泣き崩れる者。受け止め方は人それぞれだったが、わたしは同輩たちのあげる怯えた声をどこか冷めた気持ちで聞いていた。

勇者ご一行はもう二度と戦えない身体にされて、彼らを送り込んだ帝国の玉座の間に転送されたという。わざわざ命を取らなかった理由はわからないが、世界を救う武器とされる聖剣も粉々に砕け散っており二度と振るえる状態には戻らないだろうという話だ。「こんな辺鄙な場所にある修道院まで勇者敗北の噂が届くなんて、これはいいよこの世の終わりって感じね」

「やだ、デルフィーヌったら不吉なことをいわないでよ」

「ごめんなさい。でも、魔王は勇者を倒したけれどまだ王都に攻め入ってないじゃない。案外、命は助かるかもしれないわよ」

怯える同輩を慰めながら、日課の洗濯をしに井戸へと向かう。修道女として身を寄せ

ているからには、身の回りの世話は自分たちでやらないといけないのだ。それが終われば魔法や薬学の心得があるものは医者にかかれなない貧民たちの病氣やケガを見ることになっている。幸か不幸か、わたしは魔術の心得がある。修道院で教えてもらった簡単な光魔法であれば使えるので、仕事が山ほどあるのだ。

「デルフィース、怖くないの？」

「怖いけれど、いまさら動揺したところでなにも変わらないもの」

洗濯ものを桶にまとめてからドアノブを開けば、黒い服を身に着けた修道女たちが日々の勤めもせずみんな一様に頭上を見つめている。同じように空を見上げれば、まだ昼間だというのに禍々しい血のような赤い色に染まっていた。そしてその中央に、山羊のような角を頭からはやした、若い男がいる。おそらく彼が魔王なのだろう。

前言撤回だ。思ったよりわたしたちの命の灯は儂いかもしれない。

——愚かな人間諸君。貴様らの希望は打ち碎かれた。しかし諸君には助かる道がある。

我に花嫁を捧げよ。婚姻をもって和平の証となそう。

高圧的な言葉が頭上から降ってくる。おそらくはこれが魔王の肉声なのだろう。けれども空を歪ませて全世界に自分の声を響かせるなんて恐ろしい魔力だ。

こうなれば魔王に反抗的な言葉を口にしただけで、命を奪うというのも可能にちがいない。

「……なにが和平よ。花嫁、ねえ」

侵略者が勝ち取った土地の高貴な女性を手にとりたいと欲するのはよくある話だ。才媛で名高いこの国の王女は今年で十八歳。さぞ美しくなっているはずだ。万一望まれたなら、姫に選択肢はないだろう。もし断れば貴族からも国民からもなぜ自分の身を犠牲に

しないのかとそしりを受けるはずだ。もし魔王が本当に約束を守って命が助けられたとして、それで諸手をあげて喜ぶ人々を想像したらそれだけで気が滅入りそうだ。

「……忌々しい魔王に花嫁を捧げて助かる命なんていらないわ。誰かに全部背負わせるくらいなら、みんな一緒に死ねばいいのよ」

「デルフィーヌったら、なんてことを。相手は人智を超えた力を持つ相手、めったなことをいってはいけないわ」

思わず吐き捨てる、仲間の修道女に咎められる。宙に浮かぶ魔王の顔が、ぎろりとこちらを見た気がした。全身の血が凍りついたように、まともに呼吸ができなくなる。

「っ、はっ、はあ……!!」

「ちよっと、デルフィーヌ、大丈夫?! デルフィーヌ!」

立っていられなくなって地面にへたりこむと、脳内に直接声が響いてきた。

——見つけたぞ、花嫁よ。

地を這うような低い声がふいに穏やかな響きに変わる。ズキズキと割れるように響く頭痛が、途端に和らいでいく。

わけもわからないまま空を見あげる。変わらず空はまがまがしく赤く染まったままだった。

空が禍々しい色に染まった翌日、正式に魔王より哀れな花嫁を捧げるように王宮へ勅書が届いたと国中に知らされた。自分達が生き残るために、王女を差し出さなければならぬのかと国民は案じていたが魔王が望んだのは姫ではなかった。

厳しい顔に深く皺を刻んだ院長から告げられた事実、わたしはただ呆然としていた。「……冗談ですよ？　魔王の花嫁がわたしだなんて」

「残念ながらデルフィーヌ、このような不謹慎な冗談など口にできませんよ」

魔王は聖マリアンヌ修道院にいる、銀髪の青い瞳の修道女を嫁に捧げよと命じた。

あのとき、魔王の声が脳内に響いてきたのはやはり気のせいではなかったらしい。

その特徴に合致するのはわたしと、行儀見習いで一時的に身を寄せている貴族令嬢のマルガレーテだけ。その姿だけではなく心根も美しいと評判の女で、いずれしかるべき家へ嫁いで貴族の役目を果たすであろうマルガレーテ。

わたしは、貴族が使用人に手をつけて産ませた私生児で、生まれてしばらくは父の屋

敷に身を寄せていた。しかし、正式な妻が娘を産んだ途端に修道院に捨てられ、おそらく一生修道院の世話になるしか生きる道がない。

どちらを切り捨てるべきかなんて明白だ。

「……院長先生のお願いならば、しかたありませんね」

「デルフィーヌ……」

厳格な修道女のまなじりがかすかに光っている。厳格な母のような人だった。叱られたことは山ほどあれど、褒められたことは数えるほどしかない。

「結局、父は一度もわたしには会いに来ませんでしたね」

幼い頃、いずれ父が迎えに来てくれて、お前を捨てたのは何かの間違いだったと優しく抱擁してくれることを夢見てきた。黒一色の修道服ではなく、きらびやかなドレスに身をくるむ自分を想像していた。けれども、それは叶わぬ夢だったとようやくいまわたしは受け入れることができたのかもしれない。

そのあと、すぐに王宮の使いがわたしを迎えに来て、魔法で王都へと転移させられた。そして、修道院にいたところにはけて袖を通すことなどなかったであろうきらびやかな花嫁衣装に着替えるように言いつけられる。

修道女が纏う法衣を脱いでいると、胸元のネックレスが鈍く輝いた。細いチェーンには、おもちゃの指輪が通っている。今は亡き幼馴染がくれたものだ。わたしはこっそりと、それを薬指に通しその上から手袋をはめる。国のために犠牲になるのだから、このような些細な反抗くらいはいいだろう。

おそらく、魔王の気が変わらないうちに事をすすめたいのか、わたしの着替えを手伝ってくれる女官たちは誰もがせわしなく働いていて気づけなかった。

急ごしらえされたウェディングドレスに身を包み、豪華な馬車に乗り込んだ。この馬車は王都から、魔王が実効支配している街の近くまで進む。そこでわたしの身柄が引き渡されるらしい。近衛兵先導にされながらゆつくりとすすむ行列はまるでどこかの姫の

ようだが嫁ぐ先は魔王なのだから皮肉なものだ。

「まるで葬列みたいね」

溜息まじりにひとりごちれば、突然馬のいななきが響いた。窓からすこし身を乗り出してみれば、なにもないはずの空間がぐにやりと歪んでいる。膨大な魔力に肌がピリピリとする。

「喜べ、待ちきれぬから我の方から花嫁をもらいうけに来たぞ。我が妻よその愛い顔を見せておくれ」

鷹揚にしゃべっているだけなのに、思わず膝を屈してしまいそうな威圧感。もし魔王を謀ったのだとわかればこの場でなにをされるかわからないという恐怖。町中で不興を買えば住人にどんな被害があるかわからない。わたしは震える膝を勢いよく叩いて、きゅっと唇を結ぶ。

ゆつくりと馬車から降りれば、黒髪に深紅の瞳をした大柄な青年がいた。一見すると

人間のようだが、頭から生えた山羊を思わせる角が、彼が人間ではないと示していた。事前に練習したとおり、うやうやしくカーテシーをするべきなのに、身体が固まったように動かない。

「そのように縮こまって、緊張しておるのか？ 存外内気なのだな」

頬にひんやりとしたものが触れて、肩がびくりと震えた。喉奥で笑う魔王に、かっと頭に血が上る。

「っ、許しもなく女性の顔に触れないでっ！」

思わず手を払い除ると、その場が静まり返る。やってしまった、と血の気をひかせながら恐る恐る魔王の顔色を窺えば、瞠目してからわたしをまじまじとわたしの顔を見つめ、そして天を仰いで高笑いした。

「ははっ！　よい、よいぞ！　おとなしいだけの女はつまらんからな！　その気性の強さ、我が花嫁にふさわしいわ！」

なにもない空間から杖が出現し、片手で虚空を撫でる。そうすると、町並みが見えるはずの空間が裂け、岩山にそびえ立つ城を映し出す。

「一刻も早く我のものにしてやりたくなつた。さあゆこうか」

「な、えつ、ちょ、ちよつと……！」

返事をする前にかがまれて膝裏を差し入れられて持ち上げられる。抵抗する間もなく、わたしの身体は空間の裂け目に吸い込まれていった。

「ついたぞ」

固く閉じていた瞼をおそるおそる開く。きらびやかな豪奢な調度に囲まれた部屋は、自分の権威を誇示しているようで悪趣味としか思えない。そのなかでもひととき目を引く、天蓋付きの大きなベッドはきれいに整えられていて、ベッドサイドには白い煙をたなびかせている香炉がおかれている。甘ったるい匂いが部屋中に立ち込めていて、吸い込めば頭がくらくらする。

「な、に、このにおい……」

まるで火を灯されたように、身体がじわじわと熱くなっていく。魔王の手が腰に回って、いやらしく撫でさする。さっそく手籠めにしようとする魔王を、わたしはきつと睨みつける。

「っ、なれなれしく触らないでって、何度いったらわかるの……!」

「ふ、デルフィーヌは気が強いな。魔王の妻としてはそれくらいの気概がなくてはな」

「な、んで……」

わたしは同じ修道院に身を寄せる貴族の娘、マルガレーテということになっているはずだ。自分から名乗った覚えなどない。目を見開いて様子を窺うと、魔王は口の端をゆがめた。

「我が花嫁に、と望んだのはデルフィーヌだ。人間共が勝手な思い違いをしたようだが、我が望むのはそなただけだ」

魔王はわたしの顎を掴んで、強引に唇を奪った。ぬるりとした舌が口内を蹂躪する。

「んむ、っ！ ふあ……っ！」

「だが、花嫁として我に嫁いだからには義務を果たさねばな？」

ニヤリといやらしい笑みを浮かべる魔王に、ぎゅっと唇をかみしめる。

「あなたにいわれなくとも、わかつているわ……」

これから起こることを想像して、かちかちと歯が鳴る。自分の意に沿わない相手と婚

姻するなんて、貴族の娘であればだれでもしていることだ。そう言い聞かせても、無理やり身体を暴かれる恐怖に身体が強張ってしまう。じわりと涙がにじみ、視界がぼやける。

ドレスの裾に魔王の手がかかり、ぎゅっと自分の拳を握りしめる。どんな仕打ちにも耐えようと覚悟を決めて、目をつぶった。しかし布擦れの音はせず、身体を這っていた手の感覚が消える。

おそろおそろ顔を上げれば、魔王の手が頭上にあつた。何をする気なのかと見つめていると、まるで子供をあやすように頭を撫でてくる。意図がわからずに困惑していると、魔王が眉根を下げている。

「すまぬ、そのような顔をさせたかったわけではないのだ。無体を強いるつもりはなかった……」

王都に姿を現した時の、威厳ある鷹揚とした態度とは違う。恋人の機嫌を損ねて慌て

る普通の青年のように逡巡する魔王に、身体力が抜けていく。

「……っ、あなたの考えがわからないけれど、本当にわたしを花嫁に望んだのよね？」

王女でもなく、隣国まで名を轟かせる美しい令嬢ではなく、なぜ自分を花嫁に望んだのか。

「ふふ、覚えておらぬのか。まあ、それもデルフィーヌらしい」

魔王は穏やかに笑って目を細める。困惑しながらも、いつの間にか目の前の男を見ても恐ろしいと感じていないことに気が付いた。

「初夜から無理強いをしてお主に嫌われるのはごめんだ。身体を重ねるのはいつでもよい。ただ、添い寝くらいは許せよ」

「え、あ……」

魔王はわたしをベッドに横たえて、自分も隣に寝転んだ。そのままわたしの身体を抱

き寄せて、背中を優しく撫でる。その体温は人間と変わりなくて、じわりと広がってくる体温に、ドギマギしてしまう。他人の温もりを、こんなに側で感じるなんて久しぶりだろう。物心つく前に修道院に預けられてから、誰かと寄り添って眠ることなんてなかった。

「……あたたかい」

思わず小声で漏らせば、魔王はまた優しげに目を細める。

「デルフィーヌが安眠できるよう、子守歌でも歌ってやろうか？」

「……やめてちょうだい。あなたの歌なんて聞いたら悪夢を見そうだし」

「ふふ、手厳しい女だ」

思わず憎まれ口を叩くと、魔王は愉快そうにくつくつと笑った。まるで恋人同士のような甘い時間に、自分を叱咤する。理由はわからないが、自分に惚れこんでいる魔王。やわらかい笑みを浮かべながら、髪を撫でる魔王は、いま完全に油断しているはずだ。

——いまなら、わたしでも殺せるんじゃないか。

心臓の鼓動がうるさい。小さく息を吸って、気づかれないようにひっそりと魔力を練り上げる。なんの疑いも抱いていなさそうな真紅の瞳に、ちくりと胸が痛む。でも、わたしがここでこいつを殺せば、国の人々は明日から何の憂いもなく暮らせるんだ。

「我になにか仕掛けるつもりか？」

「っ！」

——気づかれた。慌てて魔力を高めて精製した光の短剣で心臓を貫こうと振りかざす。けれどもその攻撃はたやすく防がれてしまった。

「我を殺そうとするとは、本当にたいそれたことを考える女よの」

両腕を掴まれて、全く動かせない。真紅の瞳が妖しく光って、わたしを見つめる。光

の短剣が消えて、魔力が霧散していく。再び練り上げようとしても、うまくいかない。

「ど、どうして」

「すまぬがデルフィーヌの魔力を封じさせてしまった。お主は少しじゃじゃ馬すぎるよ
うだからな」

魔王はあきれたように笑って、わたしの身体に覆いかぶさってくる。押しのけようと
するのに、身体が動かない。指一本すらぴくりとも動かなかった。

「な、んで」

「これから長い間共に過ごすのだ。寢所を共にするたびに、寢首をかこうとされてはた
まらぬ。デルフィーヌに我の妻としての自覚をもってもらわねばなあ？」

鎖骨にかさついた唇が押し当てられて、ぞくりと肌が栗立つ。魔王が指をパチンと鳴
らせば、どんな魔法かいつの間にか下着姿に変わってしまう。それも、わたしが身に着
けていたはずの下着ではない。胸の飾りとおマンコの割れ目しか隠れていない。春をひ

さぐ女性でも身に着けないような下品で男の情欲を煽るただけに存在しているような下着だ。けれども手袋は相変わらず身に着けたままになっていて、それも妙なこだわりを感じて気持ち悪い。

「なっ……！」

「どうだ？ この衣装は。いつも清楚な修道女の衣装に身を包んでいるデルフィーヌは見たこともきいたこともないだろう？」

確かに、初めて目にする衣装だ。下品なデザインは羞恥心を煽ってくるし、隠したくても動けないから隠すこともできない。

「な、なんてものを着せるの？！ もとにもどして！」

怒りで声を震わせるわたしをいやらしい目で見つめている。

「我の花嫁になるのだ。デルフィーヌには自分の立場をわかってもらわねばな。とても似合っているぞ。そら、胸など零れ落ちそうではないか♡」

魔王が胸を寄せるように揉みしだく。布地からわずかに乳輪がはみ出てしまっていて、肌と乳輪の境目をすりすり♡と撫でられる。

「~~~~っ♡」

「ほう、デルフィーヌは乳輪が大きいのだな♡いじめ甲斐のあるいやらしい身体で我はうれしいぞ♡」

見せつけるように魔王の大きな手で、胸を弄ばれる。もにゅもにゅとゆっくり揉みしだかれるだけで、勝手に息が上がっていく。

「っ♡、さわ、らないで……♡」

勝手に震えてしまう自分の身体が恨めしい。この部屋に立ち込めるあまつたるい煙を吸い込んだせいで、感じているわけではないと言い訳して正気を失わないようにするの
で精いっぱいだ。

「む？ デルフィーヌ、乳首が勃起しているではないか？ 揉まれただけで感じてし

まったのか？ 物言いはキツイが身体は正直だな♡相変わらず素直じゃないな♡」

「っ、だまりなさい！ これ以上侮辱するとゆるさないからっ！ あっ……♡」

まるで自分が魔王に身体を許しているかのように笑われて、かっとな顔が熱くなる。抵抗したいのに、魔力で拘束されているせいで身をよじることすらできない。

「っ！ ひきょうもの！ 魔法を解きなさいよっ！」

「それはできぬ相談だな。デルフィーヌが真に我の花嫁になるまでは自由を与えるわけにはいかん」

喉奥で笑いをかみ殺す魔王は、愉しくて仕方がないというように飾りの周辺をくると撫でる。からかうようなその手つきに、またぶくっ♡と乳首が固くしこっていくのを感じる。

「んっ♡ふうっ♡やだ、やらあっ♡」

おぞましいと拒まなければならないのに、おマンコがじゅんと熱を帯びてくる。薄い

布に粘液が染み出て、じんわりと広がり布が張り付いていくのがわかる。煙を吸いすぎたのか。身体に灯る熱が嫌悪感をかき消しそうになる。魔王に触られたくて、乳首を固くしこらせて、おマンコぬかるませてるなんて、冗談じゃない。

「っ、ほんとうに、これ以上わたしに触れると、許さないんだからっ！」

お願いだから、もう触らないで。そう懇願しそうになる自分を叱咤して叫ぶ。

「さすがだなデルフィーヌ。この状況になってもまだ心が折れぬとは、さすが我の惚れた女よ。だが我はお前をいじめたいわけではないのだぞ？ いっしょに気持ちよくなろうというのだ。なあ？」

薄い光沢のある生地に守られた乳首をかりっ♡かりっ♡かりっ♡と爪先でカリカリされて、腰が跳ねる。

「あっ！ ああっ♡」

「我の妻として自覚を持ってもらうだけだ。お前を心から愛し慈しんでやろう。そら、

デルフィーヌ♡」

魔王はうっとり目を細めて、布地の上から乳首を摘んで、弾く。散々焦らされたせいか布越しなのに、与えられる刺激におマンコがきゅんきゅん♡と疼いてしまう。下着のナカ熱く湿っていくのがわかる♡

「あふっ♡や、やだあっ♡あんたなんて、大っ嫌いなのにっ♡なんでえ……っ♡♡」

「ふふ、身体は素直だぞ？ ほら、こんなに乳首が勃起している。我に愛でられて感じておるのだろう？」

「ちがうっ♡感じてない……っ♡」

長い指が乳首をつまみながら、手のひらでくにくくとおっぱいを揉みしだき始めた。乳首を優しく揉みこまれて、腰がぷるぷると震えてしまう♡

「ひやっ♡ちくび、もまないでっ♡や、だあっ♡」

「ふむ、揉まれるのはいやか？ ではこうされる方が好きか？」

「んひっ♡」

わたしの顔を覗きながら、魔王は指の腹で乳頭をこすったり、爪先でカリカリしたりしてくる。おマンコがじゅん♡じゅん♡と潤んで、下着がベトベトになっていく♡飾り毛もクリトリスの形も浮き出てしまっているに違いない♡

「んひっ！ あうっ♡♡ちくびっ♡かりかりしちゃやらあっ♡」

「むう、本当に強情だな。男に触られるのはじめてだから戸惑っているのだろう？　では意地を張る間もないように、気持ちよくしてやらねばな？」

魔王が何もない空間から小瓶を取り出す。何をするつもりなのかと見つめているときゅぽつと音を立ててから蓋を開けて、粘度のある液体をわたしの胸に垂らした。

「んっ♡なにこれえ……っ♡」

なまあたたかい粘度の高い液体がわたしの胸に塗り広げられていく。乳首を守るわずかな布にもたっぷりしみ込まされて、ぬるぬるの生地がびったりと肌に貼りつく。

「緊張をほぐすために我がマッサージをしてやろう♡これを塗ればデルフィーンの身体から力が抜けて快楽に身を任せやすくなるであろう？ まったく、魔王にここまで尽くさせるとは、我が妻にはかなわんな」

「なに、かつてなことって……、~~~~♡♡」

魔王は両手でわたしの乳房を驚掴みにして、ゆっくりと揉みしだきはじめた。大きな手のひらでぐにゅっ♡むにゅうっ♡と形が変わるほど強く揉まれる。

「あっ♡あふっ♡んあっ♡♡」

「ふふ、いい声で鳴くな」

魔王の指先が乳輪の縁をくるくると撫でる。もどかしい刺激に、腰がくねる。触ってほしい♡いやらしく尖り始めてる乳首、爪でカリカリしてほしい♡時折指で乳首を掠められて、ぞくっ♡と背中を熱いものが駆ける。でもその熱はすぐに去ってしまう。乳首触ってほしい♡

でも魔王に屈するわけにはいかない♡でも気持ちよくなりたい♡♡ヌルヌルの布地ごと、乳首しこしこ♡って二本の指で抜いてほしい♡♡

「やあ♡やだ♡さわっちゃやだあ……っ♡」

「ふふ、そうはいうがとても気持ちよさそうにしておるぞ？」

むにゅっ♡むにゅっ♡♡と乳房を揉まれて、乳輪の縁を爪でカリッ♡カリッ♡とひっかかれる。乳頭の窪みを爪でほじられて、腰がびくびくっ♡と跳ねてしまう。頭が真っ白になりそうなくらいに気持ちいい♡ぷしっ♡とおマンコから愛液が溢れて、布地から染み出していく♡このままこの快楽の波にのめりたい♡乳首たくさん気持ちよくしてほしい♡♡

「あふっ♡♡あっ♡♡ああっ♡♡」

「ん？ どうしたデルフィーヌ」

魔王の指先がびたりと止まる。困惑しながら目の前の男を見つめると、乳首に触れる

か触れないかのところで、くるくると円を描いた。時折触れるか触れないかのところで指を揺らすから、もどかしい快感がずうっと続く。

「あふっ♡んあっ♡♡も、やめっ♡♡」

「触ってほしいなら素直にねだれ」

「だ、れが、あんたなんか……！」

魔王は意地の悪い笑みを浮かべる。爪でカリッ♡カリリッ♡と乳首の周りを優しくひっかきはじめた。腰が勝手に揺れてしまう♡でもこんなのじゃ足りない♡ヌルヌルの布地を巻き込んで乳首をぎゅむっ♡って押しつぶされたり♡たくさん引っかいていじめ
てほしい♡

ふーっ♡ふーっ♡と荒い湿った息が漏れる。気づかれていても、自分からおねだりなんてできるわけない♡

「強情だな」

魔王は楽しそうに笑いながら、わたしの乳首にふっと息を吹きかけた。指とは違う刺激にびくっと身体が跳ねてしまう。

「ふふ、どうした？　息がかかったただけだぞ？」

「っ、やあっ♡」

今度はふうっと息を吹きかけられて腰が跳ねる。そのままふう♡ふう♡と息を吹きかけられるたびにおマンコがじゅんっ♡じゅわっ♡とお汁をあふれさせて、パクパク♡と物欲しそうに開閉してしまう♡

「あっ♡♡あふっ♡♡んあっ♡♡♡♡」

「ほら、デルフィース。触ってほしいのだろう？　素直にねだればもっと気持ちよくしてやろう」

気持ちよくなりたい♡でも屈服するわけにはいかない♡相反した気持ちがぐるぐる回る。その間も魔王は乳首に息を吹きかけたり、爪先でカリッ♡カリリッ♡と引っ搔くの

をやめない。混乱した頭は、だんだん都合のいい結論を導き出そうとする。

別に寝首を掻かなくても、いい。

魔王を肉体で籠絡して色欲にかまける生活をさせれば、殺さなくても国のためになるんじゃないか。むしろここでねだって屈服したふりをして、魔王を骨抜きにしてみえ
ばいいんじゃないか♡♡わたしもきもちよくなれるし、一石二鳥♡♡

そんな都合のいい言い訳を考える自分に戸惑いながらも、身体の熱はどんどん高ま
っていく。お腹の熱が脳にまで到達して、頭バカになる♡気持ちよくなることしか考えら
れなくなる♡

「そら、デルフィーナ♡我が愛しの花嫁よ♡何をされたいのか言ってごらん♡」
低く甘い声が、脳髓を溶かしていく。

「あっ♡♡あふっ♡♡♡おねがっ♡♡さわってえっ♡♡ぬるぬるのちくび、かりかり

「あっ♡ああっ♡してっ♡ちくびっ♡♡もっとしこしこっしてえっ♡♡♡」

魔王はわたしの乳首の根元から先端までを優しく指でなぞる。そしてきゅむっ♡と両方の乳首をつまみ上げた。待ち望んだ刺激が気持ちよくて腰が浮く。そのまま指先でくりくり♡と転がされたり、爪でカリカリ♡されたり、しこしこ♡と扱かれるたびにおマンコから愛液があふれて止まらない。おマンコヒクヒクっ♡って震えて、子宮が下がっていくのがわかる♡勝手に魔王のことを受け入れる準備をはじめてしまっている♡♡「おや、マンコにはまだオイルを垂らしていないはずなのだがなあ♡すっかりびしょになっておるぞ♡飾り毛まで透けさせて、さきほどまで私の寝首を掻こうとしておったのに、本当にたわいのう♡」

魔王は意地悪く笑って乳首をぎゅうっ♡と強くつねった。その刺激が気持ちよくて、身体がびくびくっと跳ねる。そのまま軽く引っ張られたり、乳頭を爪ではじかれたりして乳首から全身に快感が広がっていく♡♡

「あひっ♡♡♡ちくびっ♡きもちいい♡♡♡」

「ふふ、すっかり快楽の虜だな。それとも、あの香が効いているのか？」

にゆるん♡にゆるん♡にゆるん♡と乳首を扱かれる。乳首をさわられるたびに、ビリとした快感が全身に広がって、じゅわっ♡とおマンコがぬかるんでいくのがわかる♡魔王の指先が乳頭の窪みをほじるようにかりかりっ♡と軽くひっかいた。

「あふっ♡♡あっ♡♡ああっ♡♡ちくびきもちいい♡♡♡ちくびだけでいきそうなのっ♡」

「そうかそうか、そんなにこの乳首が気に入ったのか。こんなにいやらしく勃起させて♡布越しでもわかるほどピンピンに硬くなっておる♡」

魔王の指先が乳頭を優しく撫でさする。先っぽの窪みを爪でかりっ♡と搔いたり、乳輪に軽く指を這わせたりする。そのたびに頭が真っ白になって、おマンコから愛液があふれてしまう♡♡

「ああっ♡♡♡ちくびきもちいい♡♡♡あっ♡♡♡あふっ♡♡♡んあっ♡♡♡」

「ふふ、腰が揺れておるぞ？ 布越しではもどかしいのではないか？」

魔王は乳房全体をマッサージするように揉みしだきながら意地悪く問いかける。その言葉に首を横に振るけれど、本当は布越しじゃなくて直接触ってほしい。もっと強く、もっと激しく♡乳首しこしこっ♡♡♡してほしい♡♡♡

視線だけでおねだりすると、魔王はうん？ と意地悪く笑う。

「まったく、素直になれ。デルフィーヌ」

魔王はそういつて乳房を片手で掴んだまま乳首を布越しにべろりと舐め上げた。ざらりとした舌の感触が伝わってきて、腰が跳ねる。そのままべろべろと舐められたかと思えば、歯を立てて甘噛みされた♡♡突然の強い刺激に腰がビクリ♡と震える。

「あふっ♡♡♡あっ♡ああっ♡♡♡やあっ♡♡♡ちくびっ♡♡♡かんじゃらめえっ♡♡♡」

かぶっ♡かりっ♡と歯が乳首に食い込んでいく。敏感な場所を預けているという恐怖

が、より一層身体を敏感にさせていく♡白い歯が乳首の芯を押しつぶした瞬間、パチパチと脳内で星が瞬いた。

「あっ♡んひっ♡あふっ♡あぁっ♡♡♡」

ぴくんっ♡と背中が反って、甘い電流が体中に広がる。

「ん？　なんだデルフィヌ。我に乳首を食べられてイってしまったのか？　まったくおぬしは、意地を張っているがイジメられたら感じてしまうのだな？」

「あ……っ♡♡ち、ちがっ♡♡」

魔王に指摘されて顔が熱くなる。そんなわたしを魔王は面白そうに見つめた。

「そんなに気持ちよかったのか？　もつとしてやるからな♡赤くしこった淫乱乳首、シコシコされるのが気に入ったのであろう？　この無粋な布を取り払ってかわいがってやろう♡それ♡シコシコ♡」

「あっ♡まってっ♡♡あぁっ♡♡♡だめえっ♡ちくびシコシコらめえ♡」

魔王の指先が布地の中に入って、直接乳首に触れる。グミの实のように赤くなった乳首がぷっくりと膨れている。指が掠めるだけで、絶頂した快楽が呼びもどされる♡身体もまともに動かせないから、きもちいいのがずーっと身体の中で渦巻いていて、はやく弾けさせて♡ってさけんでる♡

「あうっ♡♡♡ちくびっ♡♡♡きもちいっ♡♡♡ああっ♡♡♡」

「ふふ、そんなに蕩けた顔してよほどオイルマッサージが気に入ったらしいな♡では、またたつぷりとかわいがってやらねばなあ♡」

琥珀色をした液体が、また胸に垂らされる。谷間に溜まっていくそのあたたかさに、ピクピク♡と腰がふるえる。あのぬるぬるのオイルをおっぱい全体にしみこませるように広げさせて、乳首ぬるぬるにされて左右に弾かれたらぜったいきもちいい♡♡布越しでされるよりぜったいきもちいい♡♡

「また乳首でイキたいのか？」

ぬちっ♡♡ぬちゅっ♡と粘りのあるオイルを広げながらおっぱいを揉まれる♡

「んっ♡イキたいっ♡イカせてっ♡ちくびっ♡ぬるぬるにしてえっ♡♡」

「ふふ、素直でよい。ほら♡もつと気持ちよくしてやろう♡」

オイルが染みこんでベトベトになった下着がはぎ取られて、ヌルヌルのおっぱいが蠟燭のあわい灯りの元に晒される。息するたびに上下する胸の先に、ピン♡と固くしこつた乳首が触ってほしそうに震えている。

「我が摘まみやすいようにビンビンに勃っておるではないか♡よしよし、たっぷりかわいがってやろうな♡」

双丘を揉みしだいてから、くにゅ♡くにゅっ♡とゆっくり乳首を抜きあげられる。根元から先っぽまで、丹念に愛撫されて、足先が丸まって悶えてしまう♡香油でたっぷり潤さられて、摩擦がないせいか、単純な動きでも頭がおかしくなりそう♡

「っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「まったく先ほどからイキっぱなしではないか♡そんなに我に乳首を可愛がられるのが好きなのか？　かわいいやつめ」

魔王は楽しそうに笑って、乳輪を円を描くように撫でたあと、乳頭をおっぱいにぎゅむっ♡と押し込んだ。おっぱいの一番敏感なところを指でほじられて、ビクっ♡とまた腰が震えてしまう♡

「な、なにっ……♡」

にやりと笑った魔王は、乳首を押しつぶしたまま小刻みに指を揺する♡乳首の芯をぎゅむっ♡と圧迫されて乳首の一番奥の気持ちいいところ、ずーっと虐められちゃう♡「おっ♡おぶっ♡そ、それっ♡らめっ♡ちくびっつぶしながらぶるぶるっ♡ってしたらいつちやうからあっ♡♡♡」

子宮が下がって、きゅんきゅんと疼く♡まだおマンコに指一本も触れられてないのに、乳首だけで屈服しちゃう♡

「お♡だん♡おっぱいの芯だめ♡イグ♡いぐ♡」

「またイクのか？ よしよしかわいい乳首イキ顔を我に見せておくれ♡」

小刻みに震えていた指が乳首を思い切り押しつぶしたかと思うと、そのまま摘ままれて、ぐいっ♡とぐいっ♡と引っ張られる。散々高められて快楽から降りてこれられない身体が、もう一度絶頂へと強制的に押し上げられた。胸にはしる快感が、腰を重くして、尿意に似た何かが迫り上がってくる。

「あっ♡おんっ♡♡♡イグううううっ♡♡♡」

ぷしっ♡ぷしっ♡と透明な液体がおマンコから勢いよく噴き出していく。初めての感覚に戸惑いながらも、おマンコが悦んでるのがわかる♡透明な液体は頼りないショーツに染みこみきらずに、ちよろちよろ♡とベッドへ流れ出た。

「あ……っ♡♡あうっ♡」

絶頂の余韻で、身体がびくびくと震える。魔王はそんなわたしを満足そうに見つめな

がら乳首を優しく撫でた。

「ふふ、潮まで吹いてしまったな。おぬしの身体はすっかり我好みになっておるなあ」

「潮……？」

戸惑いながら魔王を見あげれば満足そうに微笑んでいる。整った顔をぼーっと見つめていると、唇に柔らかないものが押し当てられていく。

「んむっ♡」

「上手にイケてえらいぞ♡デルフィーヌ♡」

絶頂の余韻でまだぷるぷると震えている乳首を褒めるように撫でながら舌が絡まる。口腔のナカで勝手に動き回るそれを拒むことができずに、舌をすりあわせた。

「んっ♡はは、デルフィー、我とこのような恋人同士のようなキスをしてもいいのか？それとも乳首でイキすぎて頭がばかになったのか？」

嘲るような笑いにすら、お腹の奥がきゅうつ♡とうづく。理性遠くで警告してるのに、

もうそれを聞き入れられるだけの意思が、もうわたしには残っていない。

「んちゅっ♡はあっ♡エッチなキスしながら勃起乳首よしよしされるのきもちいいのお♡」

くちを大きく開いて、下品に舌を出す。唾液がベッドに落ちるのもかまわずに、舌を伸ばせばちゅうちゅ♡と吸われる。お互いの唾液を交換するようないやらしいキス♡抵抗なく魔王の体液を身体に入れて、おマンコヒクヒクうずかせる♡

「あ♡はあ♡」

「そろそろこちらにも触って欲しくなったんじゃないか？」

潮を噴いたせいでお尻の方まで全部透けてしまったショーツを骨張った指がくいつ♡とひっぱれる。割れ目に食い込んだ布地が肉芽を押さえ付けた。

「ふっ♡ん♡」

「まったく、まだこちらにはオイルを垂らしていないはずなのに全部透けておるではな

いか。張り付いた飾り毛といやらしくしこった肉芽のかたちがよくわかるぞ♡乳首イキしてクリトリスガチガチに勃起させおって♡我が妻は本当にかわいらしいなあ♡」

琥珀色の液体がとろお♡とクリトリスに垂らされる。どろりとした液体が伝う感触だけで背中が震えた。

「もーっときもちよくしてやろうな♡いずれ我の長大なチンポを受け入れるマンコなのだ。じっくりたっぷりほぐしてやるから怖がることはないぞ♡」

勝手なことを囁きながら、ショーツからはみでた大陰唇のかたちを確かめるようにふにふに揉まれる♡

「む、すこし膨らんでいるな。肉襞を大きくさせて期待しおって♡」

「き、たいしてなんてっ♡」

割れ目を守る肉襞を揉み込まれているだけなのに、またクリがむくっ♡と大きくなっ
てしまう♡張り付いた布に擦り付けたら絶対気持ちいいのに、魔力で拘束されているせ

いでわずかにしか身じろぎできない♡♡

「っ♡ふっ♡ふあっ♡」

「ぬるぬるのショーツにガチガチに勃起したクリが透けているぞ？ 触って欲しいなら

素直になれ」

オイルまみれの手で太ももの付け根を撫でさされる。割れ目に触って欲しいのに、魔王の手は太ももの肉を外側に流す動きしかない。ときおり内側へ指が触れそうになっても、くちゅり♡と愛液を掬うだけで、肝心の場所には触れてくれない。それなのにわずかに布に肉芽が擦れて期待してしまう♡このヌルヌルの布で、勃起クリ押し付けて思いきり布をズリズリしてほしい♡

「や、あぁ♡も、焦らさないでっ♡おねがい♡おねがいだから♡」

耐えきれずに懇願するわたしに、魔王はうっとりと目を細める。

「ああ、我のかわいいデルフィーヌよ。そのかわいらしい唇でどうされたいのか教えて

おくれ♡」

「あっ♡おねがい♡クリいじめてっ♡ガチガチのクリもう触って欲しくて耐えられないのっ♡」

卑猥な言葉をためらいもなく口にすれば、ショーツがぐいつ♡と食い込まされる。クリを圧迫された状態で左右に小刻みに引っぱられれば、待ち望んでいたビリビリとした背中を駆け上がっていく♡

「あ♡きたっ♡それしゅきっ♡まおうにさわられてきもちよくなっちゃう♡♡パンパンのクリ押し潰されてイクっのにっ♡きもちよくてさからえなくなっちゃ♡♡♡♡♡パンパンのクリ押し潰されてイクっ♡♡♡のおっ♡」

すっかりバカになったおマンコが嬉しそうにきゅうっ♡と締まって、またぷしっ♡と潮を噴き出す♡魔王が手をゆるめてくれないから、ずーっとクリが布でズリズリされてきもちいい♡乳首でイクのとはまた違う、体中を駆け上がっていく強烈な快感。お腹の

奥が切ない♡切なくておかしくなりそう♡

「おほっ♡お♡あ♡しゅごっ♡ずっとときもちいい♡あぁ♡」

断続的に吹き出す潮は、ベッドで水たまりになってる♡淫乱な自分を自覚して悔しいはずなのに、身体がよりきもちよくなろうと期待してしまう♡

「うん？　ずっと切なそうな、物足りなさそうな顔をしておるな。もしやデルフィース、直接マンコを曝かれて、クリいじめられたくてそのように我に媚びるような視線を向けておるのか？」

嘲るようにクリの根元をちょん♡ちょん♡と指先でつつきながら、顔をのぞきこんでくる。ニヤニヤと馬鹿にするような笑顔で見つめられて、悪態をつきたいのに、身体はずっと正直におマンコわななかせている。

「~~~~♡♡」